



# 大阪商業大学 FD ニュースレター

第18号

2018年 3月発行

## C O N T E N T S

### 平成 29 年度 公開授業

平成 29 年度 公開授業および意見交換会 開催概要 (p.1)

公開授業を終えて (p.2~p.8)

総合経営学部	公共経営学科	教授	松村	政樹
総合経営学部	公共経営学科	教授	桑島	紳二
総合経営学部	公共経営学科	教授	東山	明子
総合経営学部	商学科	准教授	宮城	博文
総合経営学部	経営学科	教授	梅野	巨利
経済学部	経済学科	教授	石川	雄一
総合経営学部	公共経営学科	講師	中嶋	貴子

公開授業 意見交換会報告 (p.9~p.10)

## <平成 29 年度 公開授業>

### 平成 29 年度 公開授業および意見交換会 開催概要



平成 29 年度の本学 FD 活動の 1 つとして、公開授業が下記の日程で開催された。

授業科目・担当教員・教室については以下のとおりである。対象となる授業については、今年度新任の教員が担当する授業の他、授業内容や受講者数等を考慮して選出した。

### <公開授業実施日程・科目>

月 日	時限	科 目 名	担当教員名	教室
11 月 13 日 (月)	5	先端文化 (ゲーム) 論	松村 政樹	431
11 月 14 日 (火)	2	芸術と人間	桑島 紳二	425
	4	スポーツ心理学	東山 明子	422
	5	グローバル企業家のための中級経営学Ⅱ	宮城 博文	情報 4B
11 月 16 日 (木)	2	国際経営論	梅野 巨利	422
	2	経済地理	石川 雄一	423
11 月 17 日 (金)	3	公共経営論	中嶋 貴子	431

各授業において、FD 委員会より参観した教員にアンケート (興味深い点、参考になると思った点などを自由形式で記述) を実施した。また、意見交換会を 11 月 22 日 (水) 16:30~17:30 (於: 本館 4 階 会議室Ⅱ) に行った。



## 公開授業を終えて

総合経営学部 公共経営学科 教授 松村政樹  
(担当科目：先端文化（ゲーム）論)

このたびは、公開講義に多くの先生方にご出席いただき、ありがとうございました。本稿では、普段の講義で心がけていることを紹介したいと思います。

私の担当しているのは、「先端文化（ゲーム）論」です。今年度から始まった講義ですので、全学科の1年生が対象となっております。クールジャパンの1領域とされる、テレビゲームを主に取り上げ、その歴史やソフト制作過程、ゲームの面白さがどこから生まれるのか、さらには近年のソーシャルゲームへと進化してきた理由などを解説するものです。

テレビゲーム、ソーシャルゲームといった、学生にも親しみやすいテーマを扱ったことから、講義は概ね集中して聞いてくれているという印象がありました。公開講義に出ていただいた先生からは「後ろの方の学生が私語をしているのが気になる」というご意見もいただきました。教壇からでは気がつかないレベルでしたが、おそらく近くの学生には迷惑になっていたことと思います。後ろの方はどうしても騒がしくなりやすいことから、教員の声が聞き取りにくい人は前に移動するようアナウンスしても良いかもしれません。

講義の進め方においては、講義の構成、講義のスピード、二点で工夫をしています。まず、講義の構成についてですが、講義開始から20分程度をかけて、前回の講義のおさらい、今回の講義で何を学んでほしいかを説明します。これは前回の講義を休んだ学生への対策にもなり、前回出席した学生には復習をしてもらおうというものです。

講義においてはパワーポイントのスライドを用いています。テレビゲーム機の紹介、ゲームソフトの画面を見もらうことで学生の理解が深まると考えたからです。

講義のスピードは、少しゆっくりと進めることを心がけています。画像は見ているだけで構いませんが、学説の紹介になると、「丸写し」して欲しいスライドも出てきます。私自身ノートを取りながら話を聞くのが苦手なことから、「学生がノートをとっているときには話をしない」「話すときにはノートを取らずに聞くことに集中してもらおう」ことを意識しています。

学生、特に一年生が戸惑うのが、高校までは「先生の板書をすべて書き写す」のが当然だったのに、大学に入ると「要点をノートする」ことを求められることだと言われます。教員の話が「余談」なのか「本題」なのか学生には判断しかねることもあるでしょう。そこで、「余談」をする場合、「これはノートしなくて良い話ですが」と先に断りを入れるようにします。学生にとって「集中すべき時間」と「少し気を抜いてよい時間」を織り交ぜ、集中力を維持しようと考えております。



今回、FD委員会の公開授業に私の授業を取り上げていただき、聴講いただいた先生方から貴重なアドバイスをいただいた。学生が記述する部分を設けるなどの工夫について一考の余地ありとのご指摘であったと私は解釈している。あれもこれもといういささか過剰な内容であったことを反省し、今後はただ単なる知識伝達にとどまらず、受講生の能動性を向上させるための授業運営を心がける所存である。

以下、授業運営について日頃考えていることを2点述べる。

### その1 立ち止まらせ、興味を抱かせる工夫

大学入学の易化が進み、大学で学ぶことの意味や、学問することの楽しさに気づかないまま入学する学生が少なからずいる。学ぶことに対しなにも欲していない学生たちに、いくら大事だからといって熱く語りかけても右の耳から左の耳に抜けていくだけである。

広告業界に「AIDMAの法則」という消費者が商品を購入するまでの心理過程を段階的に表した古典的キーワードがある。これを広告制作の視点で読み解くと、「Attention(立ち止まらせる)→Interest(興味を抱かせる)→Desire(欲しがらせる)→Memory(記憶させる)→Action(買わせる)」となる。これになぞらえて考えてみれば、「欲しがらせる」＝「学びたいと思わせる」ところまで学生を動機づけてはじめて教育効果の高い授業が可能である。となればその前の「立ち止まらせる」「興味を抱かせる」ことが肝要である。広告はこのふたつの機能を果たすためにあるといっても過言ではない。新聞や雑誌などの平面広告ではビジュアル(写真など視覚に訴えるもの)とキャッチコピー(惹句)との組み合わせ消費者の琴線に触れる世界を作り上げ共感や興味を得ようとする。このように考えると、授業の導入部分におけるいわゆる「つかみ」の部分において、学生の興味関心を掻き立てる視覚資料の提示や心に響く問いを立てることをないがしろにはいけないと考えている。



### その2 考えを問う

ミニツッペーパーを毎回配布し、授業内容に関する問いに対して自分なりの考えをまとめ記述させている。毎回の授業ではそれらを紹介し、質問に対しても回答する。ミニツッペーパーの記述を定例化することによって、授業のポイントがどこにあるかを考えながら受講するようになる。また、考えを問うことによって、常に問題意識を持つことを習慣化できると考えている。

能動的学習は近年の高等教育の大きな潮流であるが、当初からそのように設計された授業にとどまらず、いわゆる講義形式の授業においても、上に述べたような方法を用いることで、学生の能動性を高めることは可能であり、どのような授業においても能動性を促すための仕組みを組み込むことが、効果的な能動的学習に繋がると考えている。

総合経営学部 公共経営学科 教授 東山明子  
(担当科目：スポーツ心理学)



大阪商業大学でのスポーツ心理学の講義は 10 年目になります。昨年度まで 9 年間は非常勤講師として前期一コマのみ担当してきました。そして今年度からは専任教員としてスポーツ心理学は前期と後期それぞれ 1 コマずつ担当しています。対象は全学部です。

3 年前まではずっと講義毎にレジュメを配布していました。講義の最初に本日の講義内容についてレジュメを示しながら説明し、90 分の時間内にその内容をすべて講義するというやり方です。学生たちはその時間の内容の概要を理解したうえで講義に参加するので分かりやすく、欠席した場合でもレジュメがあれば講義内容が分かるので理解の助けになる、私自身も予め講義内容を示しているので授業が進めやすい、との思いがありました。そのレジュメを一昨年から止めてしまったのは、毎回講義後に記入してもらうコメントシートに、「先生は計画通りに授業ができて満足でしょうけれど、僕は内容が多すぎて理解が追いつきません。レジュメ通りではなくもっとゆっくり進めてください。」の一文を見たからです。学生へのサービスのつもりで配布していたレジュメが実は教員としての自分の自己満足であったこと、レジュメの内容消化を意識しすぎて学生理解がなおざりになっていたことに気づかされて、愕然としました。もちろん十分に吟味されたレジュメは学生と教員の双方にとって有効であり、私のレジュメがそうではなかったことが一番大きな原因ではあるのですが、同時に、教員にとっては当たり前の内容であっても、学生にとっては初めて出会う知らない世界かもしれないという想像が当時の私には抜け落ちていたのです。

それ以来、学生が理解できているかを確認しながら授業を進めています。パワーポイントで講義の最初に本日の講義内容を項目で簡単に示し、最後には次回の内容を示します。受講生数が多いとそれだけ理解にばらつきができ授業の進度が落ちるので、必要最低限の内容を精選し学生の反応を見ながら講義をしています。受講生一人ひとりが当事者意識を持って授業に参加できるように、時間中に授業内容に関する簡単なワークを入れることや、学生たちの経験を呼び起こすようなスポーツ現場での事例を紹介すること、何よりも学生の顔を見て話しかけるように講義するようにしています。当たり前のことですが「自分のための授業」ではなく「学生のための授業」であることを心するように努めています。

今回の公開授業に参加いただいた委員の先生方は本当に丁寧に観察してご意見をくださいました。改めて自分の授業方法は大阪商業大学の学生さんのニーズに合っているのかと振り返る機会をいただき感謝しています。さらなる努力をしていきたいと思っております。ありがとうございました。



総合経営学部 商学科 准教授 宮城博文  
(担当科目：グローバル企業家のための中級経営学Ⅱ)

今回、私が担当する「グローバル起業家のための中級経営学Ⅱ」が公開授業の対象科目となり、第7回目にあたる11月14日火曜日の5限目を実施した。履修者はGETコースに所属する1年生である。彼らは2～3年生のときに、海外に留学する予定となっている。当日は11名の学生が出席した。本講義では、同日3時間目の「グローバル起業家のための中級経営学Ⅰ(以下中級経営学Ⅰ)」で英語で行った講義内容を、日本語で概説している。特に「マーケティング」を中心に講義を進めているが、マーケティングは多くの海外留学先で開講されている科目である。

今回の公開授業では、主に二点を意識し、講義を行った。まず一つ目のポイントとして「理論を補うための事例の選定」が挙げられる。学生の海外学部留学を想定し、事前学習のために、海外で主に用いられているテキストを選定している。しかし、テキストで説明されている内容は海外の事例であり、それらの事例自体を知らない学生が多い。そのため、学生にとって、講義で勉強した理論と事例を結び付けて理解することが難しい。その対策として、日本の事例(おにぎりのパッケージング、ライザップの保証制度、H.I.S.の製品戦略の変化 他)を説明することによって、マーケティング理論と事例の関連付けを意識している。

講義を行う際の二つ目のポイントとして「学生との双方向の講義」が挙げられる。海外留学先では、授業への参加や講義中に教員から意見が求められる機会が多くなることが想定されるが、講義自体の内容を把握していないと、講義中に発言したり、意見を述べたりすることはできない。そのため、本講義を進めるにあたり、講義前にレジュメを配布し、事前に講義内容の確認をさせることによって、講義内容の質問を事前に考えさせる機会を提供している。さらに、海外留学先では、日本からの学生ということで、日本発の製品やサービスに関する発表の機会が想定されるが、日本にいるうちに、日本の事例を英語で考える機会の提供も、同時に行っている。

以上二点を心掛けて、公開授業を進めたが、いくつかの課題が明らかになった。本講義では、前述した通り、理論を補うために日本の事例を用いて説明しているが、日本の事例自体を知らない学生が多い。そのため、教科書の事前の理解と同時に、日本の事例を講義前に、宿題として出題すること(例「レクサスのブランド戦略を説明しなさい」)によって、講義での理解度が高まると考えられる。



また、「学生との双方向の講義」に関しても、学生によって参加の度合いが異なる。当該講義が学生にとってなじみの薄い科目であるため、マーケティングを英語で理解することと同時にどれだけ日本語で理解しているのかが関係してくるが、そもそも日本語で当該講義を理解していない学生にとって、講義内で質問したり、意見を言ったりすることは難しい。そのため、インタラクティブな講義の進行するために、前述した事前課題をうまく活用しながら、マーケティングに関する英語・日本語双方からの事前理解といった予習の重要性を伝えていく必要があると感じた。

以上、私が常に心掛けているポイント、並びにそれらの達成度と講義進行の課題について上述した。今回の公開授業の中で達成されている部分と同時に課題を参考にしつつ、今後の講義運営に生かしていければと考えている。

### 1. 刺激的で有効な本学の FD 活動

今年度から本学教員として着任したのものと  
て、本学の FD 活動が厳格に実施されていることに、  
まずは、良い意味での驚きと感動を覚えている。私  
の授業には4名の教員が参観に訪れた。公開授業後  
に開催された意見交換会では、詳細な授業参観コメ  
ントにもとづき、授業担当者と FD 委員会関係者との  
積極的な討論が行われ、非常に刺激的であった。



### 2. 授業の取組と工夫

私の授業における取組や工夫は、次の3つである。

「パワーポイントスライドを一切使用しない」。「大教室であっても教室を歩き回り学生と対話型授業を実施する」。「受講態度の悪い学生には厳格に対応する」。

今日、パワーポイントを使用しない授業など時代遅れも甚だしいと思われるであろう。しかし、授業は学会発表ではない。授業中は学生も教員と同期化して、しっかり説明を聞き、板書を見てノートを取り、体全身を使って学習すべきであると常々考えている。

筆者は、たとえ大教室でも教室後方まで入っていき、直接学生に問いかけることを意識的に行っている。緊張感を与えるためであり、学生と双方向に学ぶ姿勢をもちたいためである。授業評価アンケートで、筆者は「熱意ある」項目で絶えず高得点をいただくが、この熱意の源泉は、昔ながらの板書スタイルと歩き回る授業にあると思っている。

授業中における私語や遅刻入室者には厳格に対応している。授業初回開始時には、本学建学の理念「世に役立つ人物の養成」とこれを支える柱の1つ、「思いやりと礼節」を学生に説く。「君たちは、私語や遅刻入室によって他の受講生に迷惑をかけることが、本学の理念に沿うものだと思うか」、そう問いかけるのである。受講態度に対する厳格な対応は、本学の理念にもとづいて行う。

### 3. 反省・改善すべき点

改善しなければならない点は、板書による授業に由来するものである。すなわち、「見やすさ」の改善である。熱意ある授業は、反面、教員が熱くなりすぎ、板書文字が乱れ、秩序ある板書が保てなくなるという欠点もはらんでいる。授業評価アンケートで指摘される筆者の欠陥は、この板書文字に集中している。熱い授業の展開が乱雑な板書につながってはいけない。このことを改めて反省点として自ら肝に銘じなければならない。

改善すべきもう1点は、これも筆者の熱意が裏目に出たものである。授業進行の時間配分がまずく、授業後半は早口で進め終えてしまうことがよくある。これは良くない。授業に熱意は必要であるが、同時に冷静さも求められる。筆者にとっての課題は、このバランス感覚である。

経済学部 経済学科 教授 石川雄一  
(担当科目：経済地理)

経済地理は、経済学部経済学科 3・4 年次向けの専門選択科目である。経済地理と関連する科目として、多くの大学で地域経済論が開講されているが、互いの専門書を見ると近接科学としての両者の相違点が述べられている。違いを一言でいうと経済地理は地理学に軸足を置いた学問ということになろう。また経済地理は理論的な系統地理と地理学の伝統である地誌的なアプローチからなり、とくに後者が地域経済論等の経済系の科目とは異なる特徴となろう。そちらはむしろ地域学に近い関係にある。担当者の授業では、地域経済論でも触れる機会があろう古典的な産業や都市の空間立地論と、現代社会における空間立地の変化を理論的に教えて、それを地誌学的なアプローチで現実の地域に適用するという流れで一連の講義を組み立てている。



今回の公開講座の内容は、その中盤で、古典的な産業立地論を一通り講義した後に、郊外鉄道の発達と郊外化、都市化の関係を説明した内容となっている。古典的な産業立地論では輸送費・交通の課題が立地に大きな影響を与える。そこで本講義では、交通の発達によって都市構造がどのように変化するのかを理解するのがねらいである。履修生は 100 名程度で、4 年生の出席率がそれほど高くないせいか、毎授業時の出席者数は 70 名程度である。毎授業時、携帯・スマホシ

ステムを利用した出欠確認を授業開始時に（概ね 5 分程度の前回の授業の復習が終わった後）、また出席確認を兼ねた小テストを授業最後に行なっており、出席率を高める努力を行なっている。小テストを行う理由としては、さらに授業に集中してもらいたいという目的もある。

担当者は、地理学の講義では地図（地形図等の一般図、データマップ等の主題図）、グラフ・写真が重要であると考え、早くから、書画カメラ、プロジェクターなどを活用してきた。そのためプロジェクターを活用した授業では地図や写真の点数を多くしている。

授業の資料はカラーの地図・写真が多く、履修生がカラーで活用できるように、資料は事前に授業連絡にて PDF ファイルで配信している。公開授業当日の配布資料は、事前に資料を用意していない学生向けのものである。残念ながら、事前に資料を用意して、講義に臨んでいる学生は少ない。さらなる周知が必要である。また資料の配布場所（前列の机の片隅が良いのではというご指摘）、サイズ（地図・グラフが多いので大きくすべき）に関してご指摘いただいた。全学生が事前に資料を用意できるようになれば、これらの問題は一挙に解決するが、今後の課題として検討させて頂きたい。





## 公開授業と担当科目の概要

公開授業では、「公共経営論 (P)」を担当致しました。本授業は、公共経営学部公共経営学科（平成 28 年度以前の入学生）の必修科目であり、一年次配当時に同科目の単位を得ていない学生を対象として開講されています。今年度は、2 年生以上の 130 名程度が履修しています。

公共に関連する組織や事業の経営主体は、政府に限らず、企業、NPO、市民などがあります。また、



分野が多岐に渡ることから、公共を理解するためには、多角的な視点が求められます。そこで、本授業の前半では、各回の学習テーマを設定し、テーマに関連する理論や概念、専門用語の解説、事例の紹介などを行います。そして、授業の後半では、既習の理論や概念から発展した事例やテーマについて学ぶことにより、多様な主体が公共の経営において果たす役割と相互関係の理解を深めることを目標としています。

## 公開授業の内容と講義の進め方

公開された授業は、全 15 回中の 8 回であり、当日の学習テーマは「CSR（企業による社会的活動）」でした。講義の冒頭では、毎回、5 分程度で前回の授業内容について復習を行います。学生にとっては幅広い分野に及ぶ公共の概念や経営に関して多角的な視点から学ぶことになるため、前回の復習を授業の冒頭に行うことにより、当日の学習テーマと既習範囲の関連性を示すように努めています。

授業内では、学習した理論や概念について、理解を深めるために事例の紹介を行っています。例えば、「CSR」の授業では、阪神・淡路大震災を体験した神戸の製菓企業が、東日本大震災の被災者に対する支援として販売する「寄付付き商品」の事例を取り上げました。実際に販売されている商品や地域の取り組みなど、身近な事例を知ることにより、社会への関心や社会参加の意識向上に繋がればと思っています。

## 今後の課題

公開授業後の意見交換会では、授業改善に資する貴重なご意見を多数頂きました。誠に有難うございます。本授業は、主に再履修者を対象とするため、学生の出席を継続させながら、理解度の達成状況も確認していく必要があると考えています。また、授業における学生の積極的な発言を促すための工夫も今後の課題です。

最後になりましたが、公開授業の機会をご提供下さいました FD 委員会の皆様、授業に参加下さった先生方に深く御礼申し上げます。



## 公開授業 意見交換会報告

2017年11月22日(水)に第8回FD委員会・公開授業意見交換会が開かれた。参加者は公開授業担当教員、FD委員、公開授業参観教員の計20名であった。

担当教員、参観教員それぞれに授業の進め方やアンケート結果を振り返り、以下のような感想や意見が出た。

<感想・意見>

### 【授業関係】

- ・パワーポイントをスマホで撮影する学生について、参観者から指摘があったが、許可も禁止もしていない状況である。スマホで撮影したとしても、試験前に苦勞するのは学生自身であるため、特に注意はしない。
- ・学生の感想を聞く機会は設けていないので、今後、ミニレポート等で感想を聞いたり理解度を確認したりすることも取り入れていきたい。
- ・男子学生が多く、またアートに関心のある学生ばかりではないことを考慮して、車など身近なものを題材として取り上げるようにしている。
- ・視覚的な資料をメインに講義を展開するよう心がけており、その方が学生の集中力も維持されているように思う。
- ・学生の反応を見ながら、色々な手法を試している。
- ・本学はノートを取るのが遅い学生が多いと感じている。書くべきところ、書かなくてもよいところを示さないと、すべてを書き写そうとするために授業の進度が遅くなってしまう。パワーポイント上で、書くべきところは色分けをして示すようにしている。
- ・理解を促すために、より身近な例を挙げて説明することを心がけている。
- ・理解度を確認するため、学生に説明させるようにしている。
- ・学生にノートを取らせたいことと、板書をする方が熱意ある講義を出来ると教員自身が考えているため、講義のインデックスのみを配布し、板書を行っている。
- ・私語に気づいたら、退室させている。また、5分以上の遅刻は原則認めず、入室不可としている。これらはシラバスに記載している事項であり、学生たちも概ね守ってくれている。
- ・板書について、どこに何を書いたか分かりづらい状態になってしまうことが課題である。
- ・学生からコメントを提出してもらい、講義に反映させている。
- ・地図を多用するため、パワーポイントを使用している。早口になってしまうことが無いよう留意している。
- ・講義の内容については、関連する科目の内容を考慮しながら決定している。
- ・講義の最後に小テストを実施することで、学生の居眠りを防止している。また、講義の最後にも出欠を取るという役割もある。実施した小テストは返却していないが、テスト内容の復習や正解の確認を次回の講義で行うことはある。
- ・再履修科目であるため、できる限り講義に興味を持って、継続的に出席してもらえるよう工夫している。また、同じ内容を繰り返し伝えるなど、講義の進行についてはかなりゆっくり進めている。
- ・パワーポイントで講義を行っている。
- ・極力テキストに沿って講義を進めているが、抽象的な概念が多いため、事例紹介・関連する動画を見せる

- ・現物を持ち込んで示すなど、自分たちの生活とのつながりを感じてもらえるようにしている。
- ・私語についてはしつこく注意し、場合によっては退室を促すこともある。
- ・今後は manaba を活用した小テスト等、定着度の検証を行いたい。

#### 【資料関係】

- ・手元資料については、スクリーンが見えない場合もあるかと思い配布しているが、ノートを取らない学生がいるため、その対策が今後の課題である。学生には「資料に記載していないことを試験に出す場合がある」と伝え、メモを促している。
- ・アメリカのテキストを使用しており、それに基づいたパワーポイントを作成し講義資料としている。国内の事例を取り入れるよう心がけている。
- ・資料のデータ (PDF) は事前に manaba で配布している。
- ・配布資料は穴埋め式にしており、特に重要な点がどこなのか、学生に分かりやすいよう工夫している。
- ・配布資料を S-Navi! の授業連絡にて PDF で配布し、合わせて補助的に印刷した資料を講義当日にも準備しているが、大半の学生が当日の印刷された資料を当てにしているようだ。
- ・プロジェクタの解像度がより高いものになると、資料も伝わりやすくなると思う。
- ・穴埋め式の資料を配布している。キーワードのみを穴埋めにして、重要な点を示している。

#### <孫副委員長・公開授業ワーキングリーダー 総括>

公開授業の対象科目は、新任の先生がご担当される科目を中心に選んでいる。日頃から疑問に感じておられる点を、このような意見交換の場で多少なりとも解消していただければと思う。また、前任校等で培われたノウハウを参考にさせていただきたいと考えている。

カリキュラム改正により、非常勤の先生が担当される科目も多いため、非常勤の先生方の FD が今後の課題となるかもしれない。また、GET コースの科目について、今後は留学から帰国した 3 年生以上の授業を対象としたいと考えている。なお次年度は公共学部の開設年度となるため、今年度以上に学科のバランスを考慮して対象科目を決定したい。

#### <西嶋委員長 まとめ>

今年度はコース制の完成年次を迎えた。各学科の特色を学生が体系的に学べるよう、同一コースに属する授業科目のつながりを担当教員同士で意識していくことが出来れば、より効果的な学びとなる。今後もより積極的な意見交換の機会として、公開授業を継続していきたい。



大阪商業大学 FDニュースレター 第18号

発行日：2018年3月20日

発行：大阪商業大学FD委員会

〒577-8505 東大阪市御厨栄町4-1-10

Tel 06-6781-8816 Fax 06-6781-8438